

第IV章 松林 網久保B遺跡

第1節 調査の概要

第1項 網久保B遺跡の概要(第20図、第10表)

これまで本格調査が2回と公共下水道布設工事に伴う発掘調査が1箇年度行われている。古代を主体とした遺構・遺物が確認されており、墨書き土器をはじめ緑釉陶器や皇朝十二銭が出土するなど貴重な資料が多く確認されている。

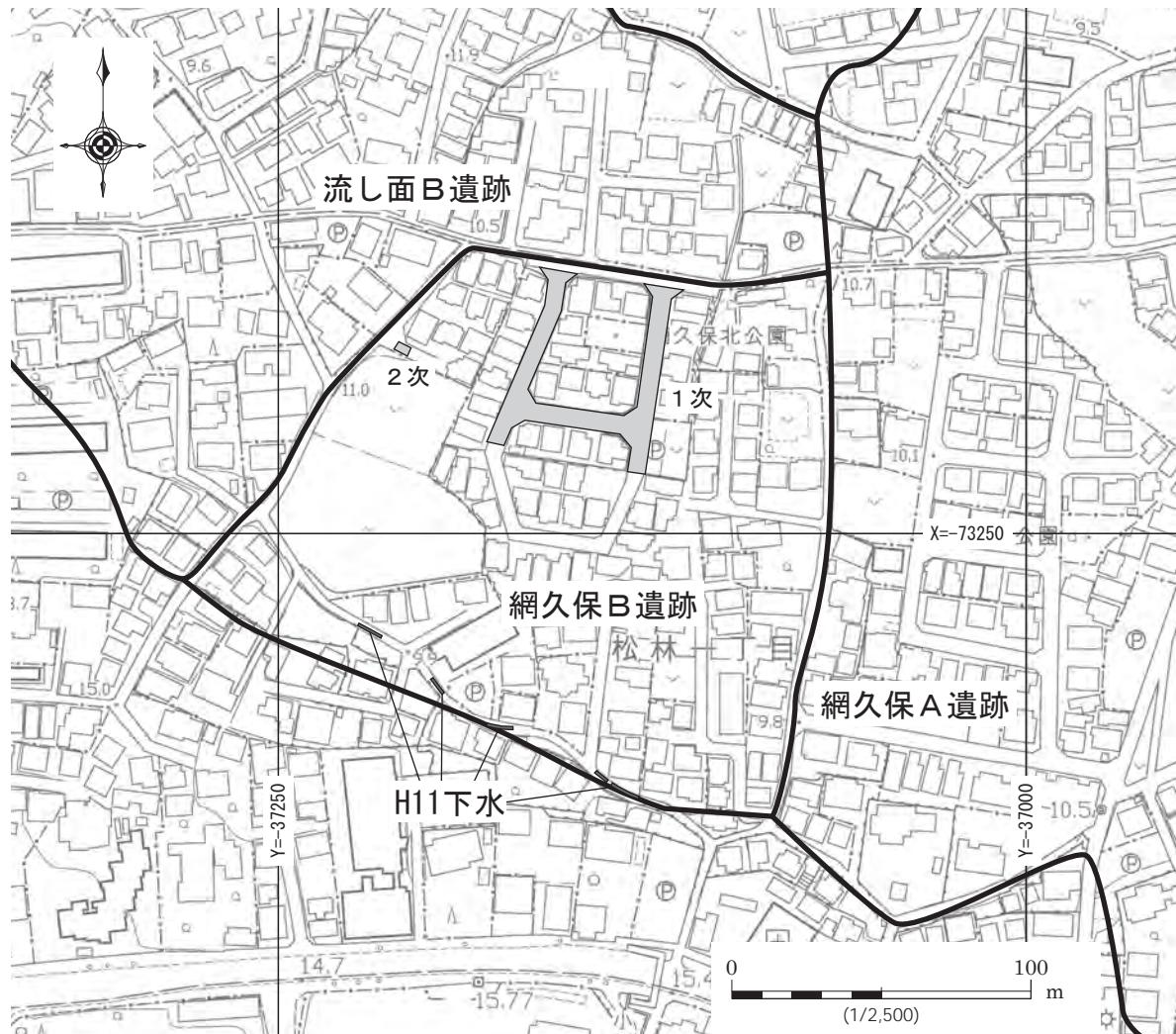
第1次調査地点は、遺跡の中央部から北半部にかけての宅地造成に伴う引き込み道路部分であり、1,200m²の調査であった。古墳時代前期、古代、中世、近世の遺構・遺物が確認されており、主体は9世紀後半～10世紀代の集落に関連する遺構であった。市内初出土の皇朝十二銭「寛平大寶」や墨書き土器が出土したことから、通常の集落とは異なる性格の地域であったと推測される。周辺遺跡からも帶金具が出土するなど特殊な状況が窺える(林原ほか 1998)。

第2次調査地点は、第1次調査地点の西側に位置する。宅地造成引き込み道路部分の埋設管工事に伴う発掘調査であり、14.5m²の調査であった。小規模な調査区であったが、竪穴住居址2軒、溝状遺構1条、ピット6穴と遺構密度の高さが窺える内容であった。竪穴住居址からの土師器出土量が多く、土器年代は9世紀代であった。第1次調査地点の年代観と共に通していることから、同一集落の一端を確認したものと推測される(伊藤 2011)。

公共下水道布設に関連する遺跡調査は、今回報告する平成11年度の調査のみである。

第10表 調査地点一覧表

次数	調査年月日	面積 (m ²)	主な遺構と遺物	文献
	調査組織			
網久保B 遺跡 1次	平成9(1997)年5月12日 ～ 9月30日	1,200	古墳時代 古代 ：土坑・ピット6基 土師器(前期) ：竪穴建物址7軒、掘立柱建物址3棟、井戸址5基、 土器集中遺構1箇所、道状遺構1条、溝状遺構30条、 土坑・ピット多数 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑 釉陶器、皇朝十二銭(「寛平通寶」)、鉄製品(釘)、 木製品(井戸枠部材)	1
	松林・網久保B遺跡発掘調査団		中近世 ：溝状遺構3条、土坑・ピット10基 陶磁器	
網久保B 遺跡 2次	平成22(2010)年9月27日 ～ 10月4日	14.5	古代 ：竪穴住居址2軒、溝状遺構1条、ピット6穴 土師 器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(釘)	2
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団			
網久保B 遺跡 H11下水	平成11(1999)年5月25日 ～ 5月28日	39.4	近世～近代 ：溝状遺構4条、ピット1穴 陶器、磁器、舶来磁器、 炭化物	本書
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団			



IV 網久保B遺跡

第20図 調査地点位置図 ($S=1/2,500$)

引用・参考文献

- 1 林原利明・椎名和生・奥村明子 1998『神奈川県茅ヶ崎市 松林・網久保B遺跡発掘調査概報』 松林・網久保B遺跡発掘調査団
- 2 伊藤俊一 2011「17. 松林網久保B遺跡第2次調査」『第22回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

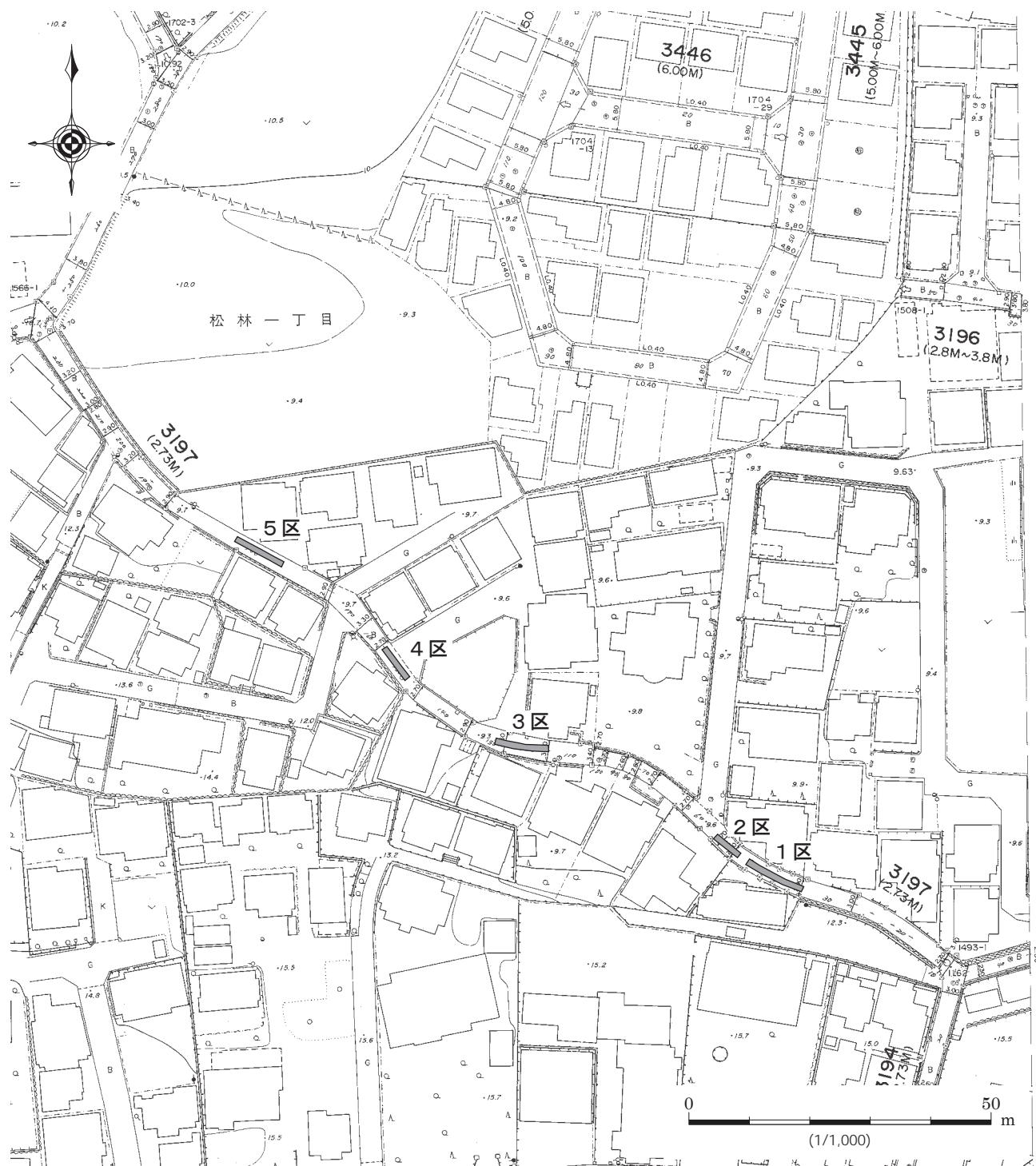
第2項 調査の方法と経過(第21図)

本調査は平成11年度の公共下水道布設工事に伴うものであった。

調査区は計5区を数えた。また、総延長距離は39.1mで総調査面積は39.4m²であった。

調査方法は布掘り調査を実施し、平板測量による記録保存と隨時写真撮影を行った。

現地調査は5月25日に1区を開始し、5月28日に5区を調査して終了した。なお、調査地点の市道は市民の生活道路として重要な役割を果たしているため即日復旧とした。



第21図 調査区位置図 (S=1/1,000)

第3項 基本土層(第22図)

本調査地点の現況は舗装されており市道3197号線として使用されていた。砂丘の南斜面に位置しており、堆積土は砂が主体である。無遺物層は黄褐色砂であるが、部分的に酸化し赤褐色を呈する。

近代の遺物を含む第I-c層直下は地山層(無遺物層)の第V層であり、古代～近世の遺物包含層は消失していた。なお、標高は5区から1区へ向かい下降傾斜している。

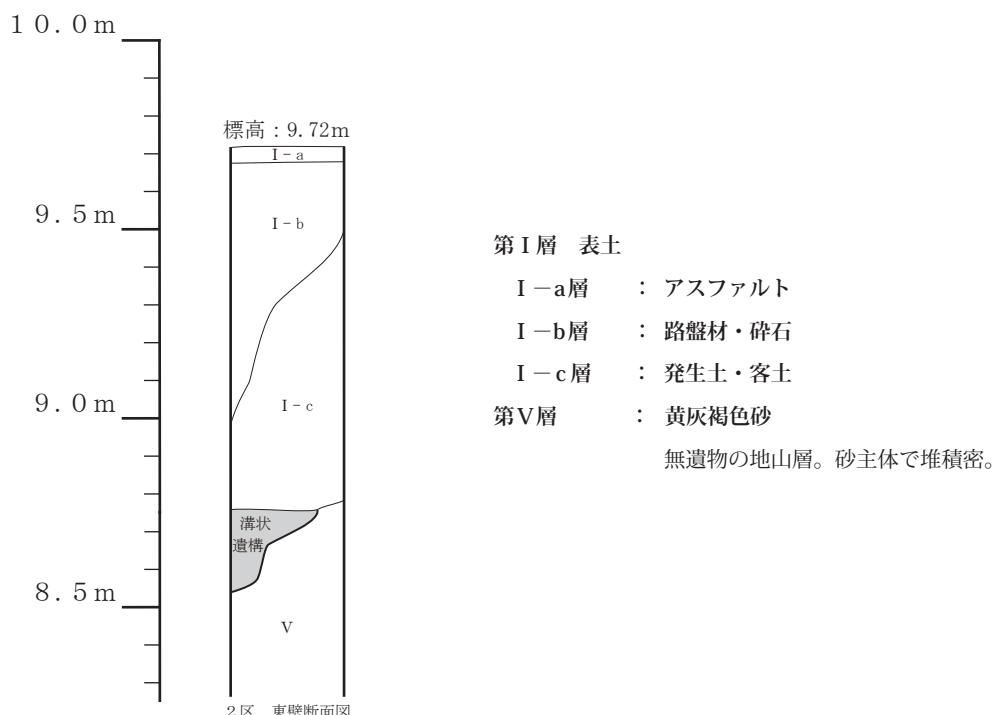
第2節 発見された遺構

1区(第23図、図版5)

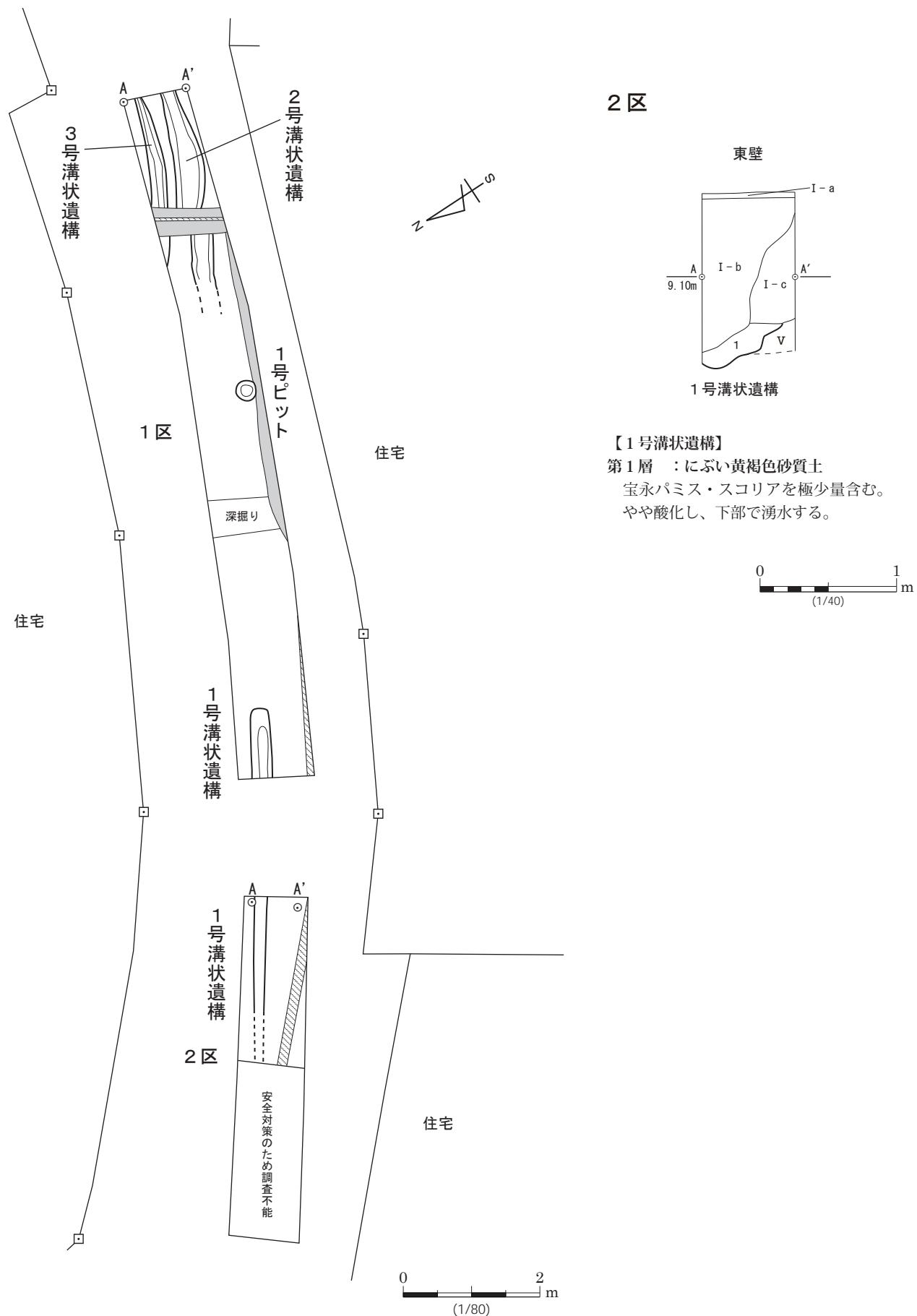
遺跡の南端部に位置する。調査区の延長距離は10.2mで東から西方向に掘削した。埋土と客土の堆積が厚く、直下で無遺物層である地山層(V層)を掘り込む近世前半以降の溝状遺構とピットを確認した。

1号溝状遺構は調査区の西側で確認され、調査区と同軸方向に延長する。残存規模は長軸1.02m、短軸0.30m、深さ0.09mである。遺構覆土直上はI-c層であり、V層を掘り込み構築されている。覆土に近代の陶器を含むことから、近代の遺構であると推測される。

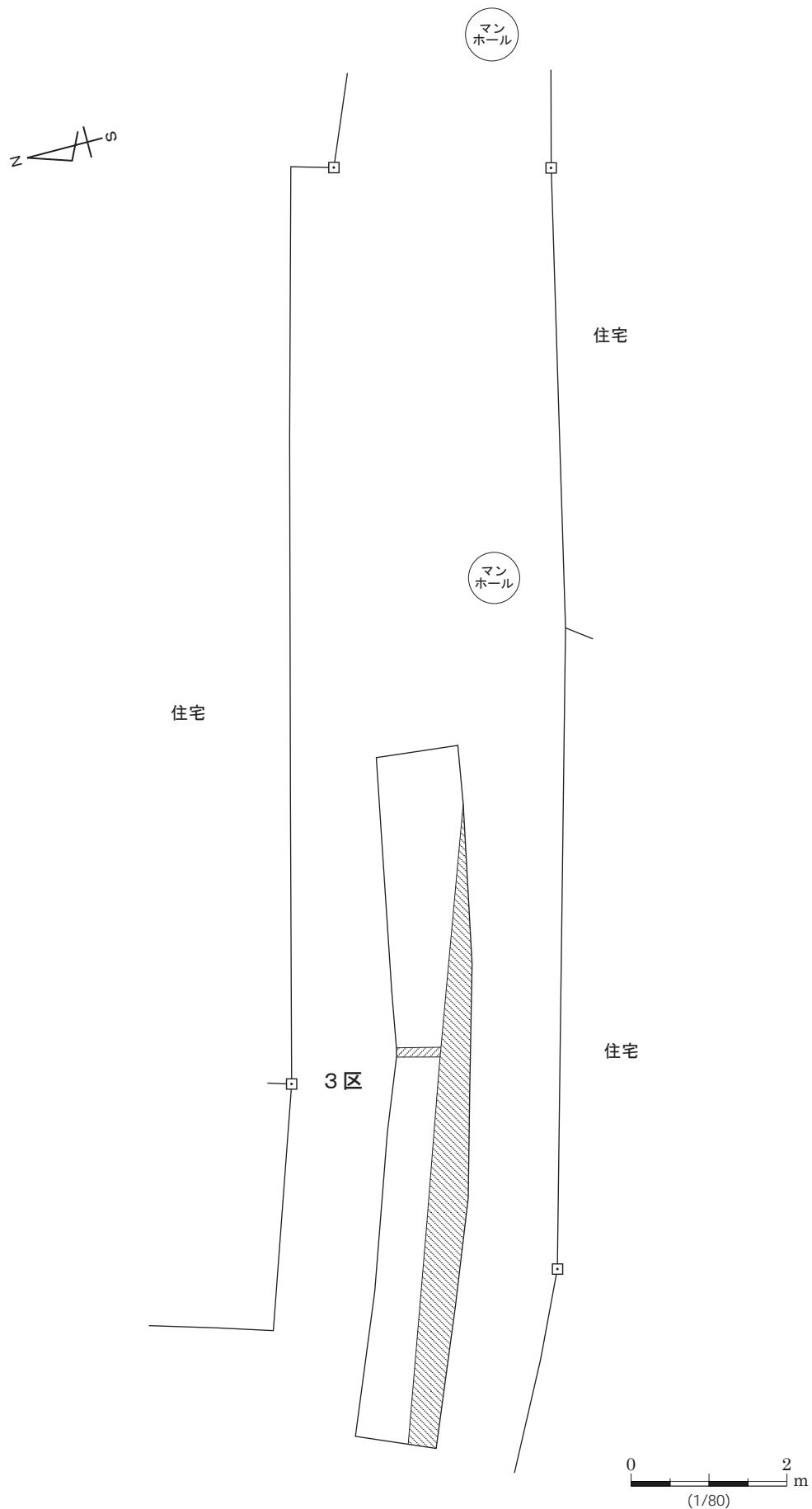
2号溝状遺構は調査区の東側で確認され、調査区と同軸方向に延長する。残存規模は長軸2.88m、短軸0.41m、深さ0.14mである。覆土は1号溝状遺構に近似しており、遺構の西端は不明瞭であった。V層を掘り込み構築されている。近代の遺構であると推測される。



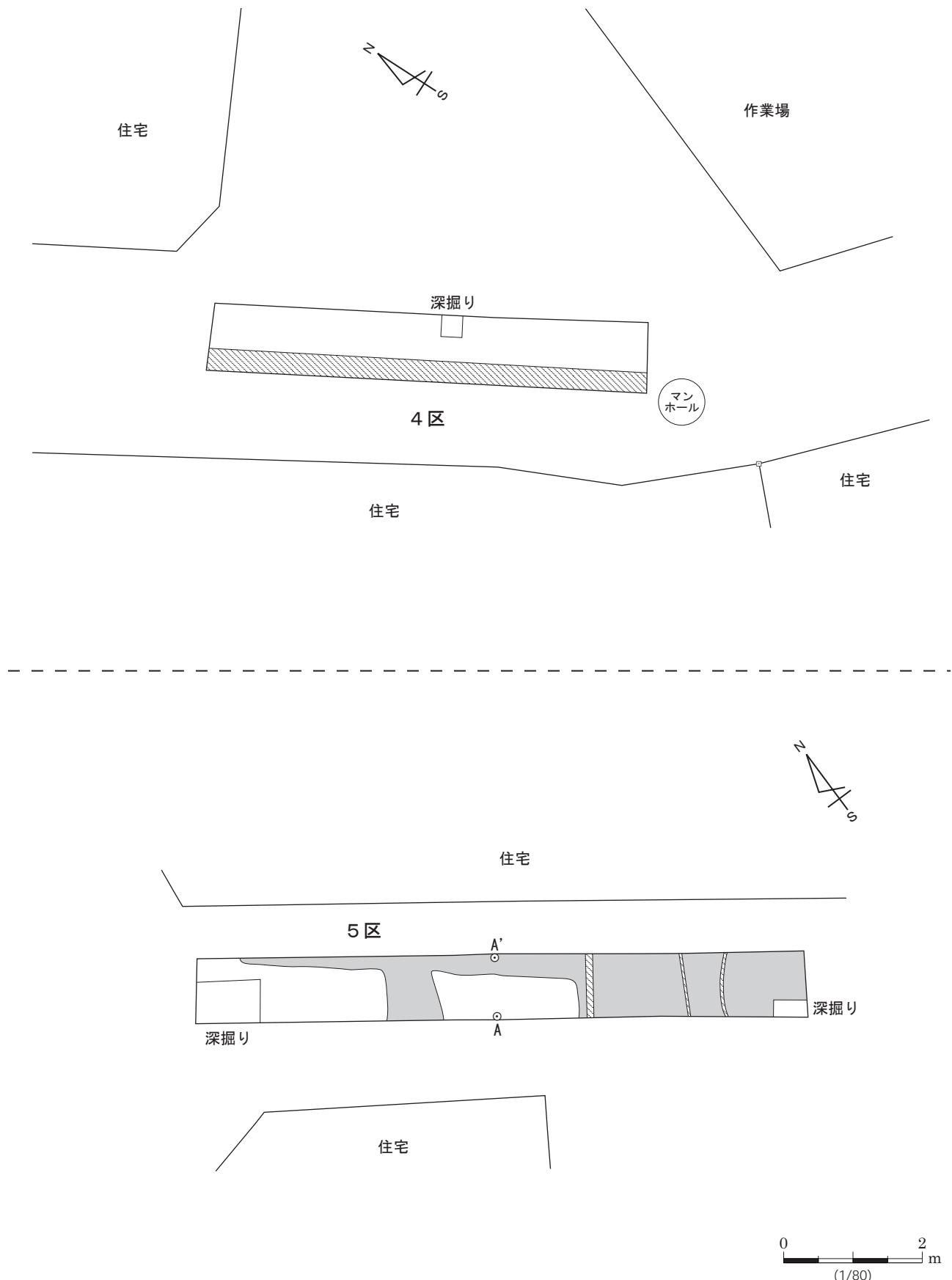
第22図 基本土層図 (S=1/20)



第23図 1・2区平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



第24図 3区平面図 ($S=1/80$)

第25図 4・5区平面図 ($S=1/80$)

3号溝状遺構は調査区の東側で確認され、調査区と同軸方向に延長する。2号溝状遺構と平行しており、同一の目的のために構築されたものと推測される。残存規模は長軸2.43m、短軸0.23m、深さ0.12mを測る。覆土の状況は1・2号溝状遺構と近似しており、遺構の西端は調査区外へ延長している。近代の遺構であると推測される。

1号ピットは調査区中央部で確認された。残存規模は長径0.30m、短径0.29m、深さ0.12mである。覆土に宝永パミス・スコリアを含み、V層を掘り込み構築されている。近世前半以降の遺構であると推測される。

2区(第23図、図版6)

1区の北東側約2mに位置する。調査区の延長距離は5.0mで東から西方向に掘削した。1区と同様の堆積状況を呈しており、埋土・客土の厚い堆積がみられた。なお、調査区の西半部については崩落のため、安全対策として調査を中止した。

1号溝状遺構は調査区の全域で確認された。V層を掘り込み構築されており、調査区と同軸方向に延長する。覆土に宝永パミス・スコリアを極少量含むことから、近世前半以降の遺構であると推測されるが、覆土直上にI-b層の堆積がみられることから、近代の早い段階で埋没した様子が窺える。

3区(第24図、図版6)

2区の北西側約30mに位置する。調査区の延長距離は8.8mで東から西方向に掘削した。調査区の全域が既設埋設管の掘り込みによって攪乱されていた。また、埋土・客土の堆積が厚く、I-c層の直下はV層であり、遺構は確認されなかった。

4区(第25図、図版7)

3区の北西側約22mに位置する。調査区の延長距離は6.3mで東から西方向に掘削した。3区と同様に調査区全域が既設埋設管の掘り込みにより攪乱されており、遺構は確認されなかった。部分的に深掘りを行ったところ、I-c層の直下にはV層の堆積が確認した。

5区(第25図、図版7)

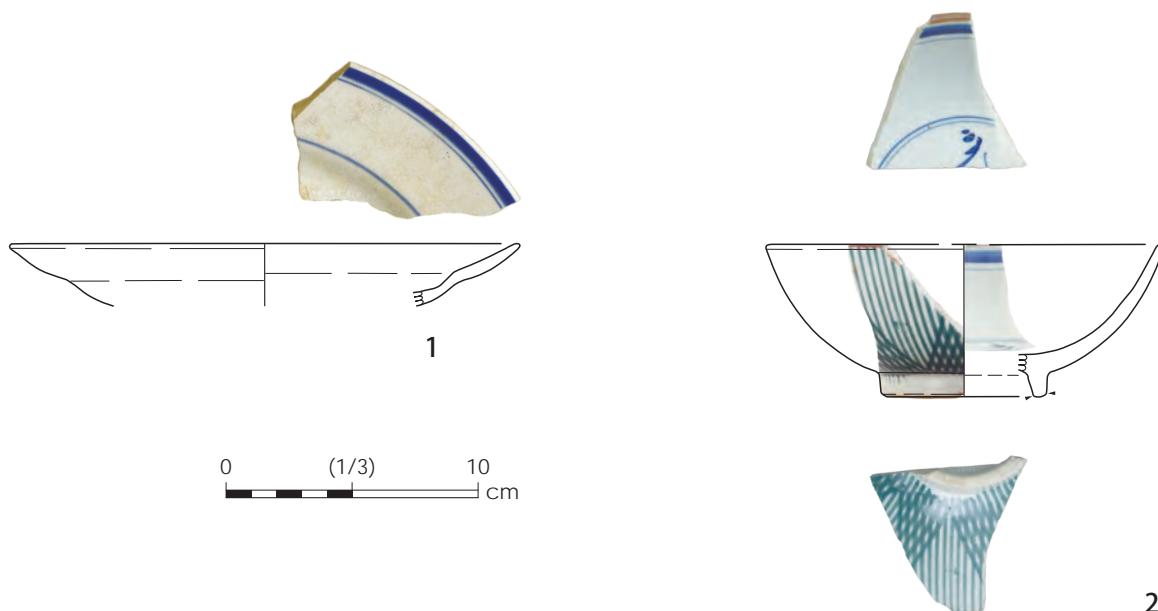
4区の北西側約21mに位置する。調査区の延長距離は8.8mで東から西方向に掘削した。3・4区と同様の状況を呈しており、調査区全域が既設埋設管の掘り込みで攪乱されていた。部分的に深掘りを行ったところ、I-c層の直下にV層の堆積が存在することを確認できた。

第3節 発見された遺物

出土遺物は収納箱にして0.5箱分であった。総量は陶器(近代)4片76.1g、磁器(近代)11片201.8g、舶来磁器(近代)1片18.7g、炭化物2点0.8gである。表土および埋土からの出土が主体であり、遺物の時期は近代のみであった。このうち、2点を図示した。

1区(第26図、第11・13・14表)

1は包含層から出土した軟質磁器であり、ヨーロッパ窯系の舶来磁器である。西洋磁器に多くみられる段の付く皿であり、内面には人工コバルトによる圈線が描かれている。表面には多数の貫入がみられ、胎土の透過性は低い。デルフト窯に近似した様相を呈している。

第26図 1・4区出土遺物 ($S = 1/3$)

第11表 1区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量・観察
1	磁器皿	調査区一括	口径: (20.2)cm 底径: (ー)cm 器高: 2.5cm 重量: 18.7g 残存: 口縁部小片 焼成: 良好 色調: 白色(N8 胎土) コバルト色(染付) せいけい: 輪轆成形 産地: ヨーロッパ 文様: 内面=圈線 年代: 19世紀 備考: 貫入多数、舶来磁器

第12表 4区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量・観察
2	磁器碗	調査区一括	口径: (15.6)cm 底径: (6.0)cm 器高: 6.1cm 重量: 46.5g 残存: 口縁～底部1/6 焼成: 良好 色調: 灰白色(N8 胎土) 吳須色(染付) 茶色(口錫) 緑色(色絵) せいけい: 輪轆成形 産地: 濱戸美濃系 文様: 内面=文字・圈線(染付) 外面=櫛目(色絵) 年代: 大正時代

第13表 出土遺物集計表

出土遺物	片数	重量(g)
陶器(近代)	4	76.1
磁器(近代)	11	201.8
舶来磁器(近代)	1	18.7
炭化物	2	0.8

4区 (第26図、第12～14表)

2は包含層から出土した瀬戸美濃系磁器であり、人工コバルトと色絵の発色から大正時代の製品と推測される。口縁部には鉄釉による口錫を施し、内面には人工コバルトで圈線と文字を、外面には緑色で櫛目文が描かれている。

第14表 出土遺物一覧表

調査区	遺構名称	出土遺物
1区	調査区一括	陶器（近代）3片75.8g、磁器（近代）7片98.1g
	1号溝状遺構	陶器（近代）1片0.3g、炭化物2点0.8g
	1号ピット	舶来磁器（近代）1片18.7g、磁器（近代）2片32.3g
2区	調査区一括	磁器（近代）1片24.9g
4区	調査区一括	磁器（近代）1片46.5g

第4節 まとめ

本調査地点は近現代の開発に伴い削平を受けており、既設埋設管の掘り込みの直下には無遺物の地山層であるV層の堆積が確認された。部分的に遺構・遺物が確認されているが、いずれも明治～大正、昭和初期にかかる近代の所産であった。遺構については溝状遺構としているが、規模や集中状況から耕作に伴う畝状遺構である可能性が考えられる。